

牧師室から 2023. 9. 3

この間、楽譜棚から適当に一冊引き出してパラパラめくったら、朱色の書き込みがあったので、当時すなわち何十年も前のことを思い出して懐かしく思った。ベートーヴェンの悲愴ソナタである。ベートーヴェンの比較的若い時の作品らしいが、名前の「悲愴」については本人が付けたかどうかははっきりしないようだ。

若い時の悲しみというのは、形容があまりうまくないが、所謂「鋭い痛み」という感じのものではないか。それに対して、この世の辛酸をなめ尽くして老いた者の悲しみは、そこはかたなく深くから込み上げてくるような、捉えどころのないじわっとしたもののような気がする。

ベートーヴェンは悲愴ソナタを書いた時、当時とてもよく売れたようである。若い時の悲しみは誰でも味わうことがあると思うが、それが世間でも共感を呼んだのかもしれないと思った。

私は以前にこの欄で、彼の後半生における苦しみや悲しみが、それ自体を通して喜びに変わったことを書いたことがあるが、私どもにも悲しみを喜びに変えてくださるお方がおられる。このことを確信して主と共に歩んでいきたいと思っている。

「はっきり言うておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。」(ヨハネによる福音書 16 章 20 節)

(鈴木淳一牧師)